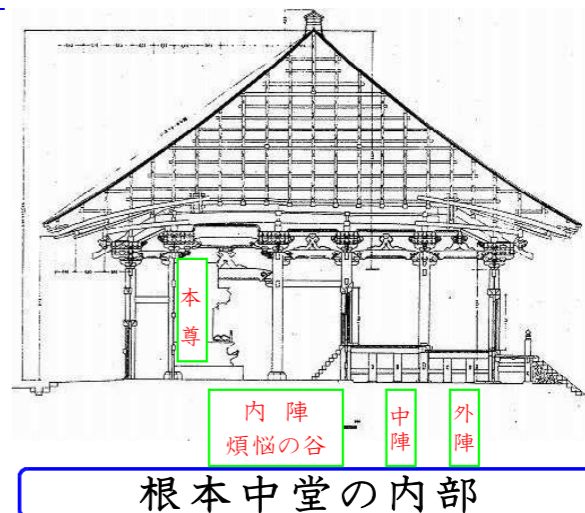


ほとけの混和会だより

平成二十六年九月
東光院
仏の混和会
第106号



【煩惱の谷】
天台宗の本山である、比叡山延暦寺、このお山の中心と成るお堂が根本中堂で御座います。このお堂の内部の造りが、普通のお堂と大きく異なっております。その堂内は参拝者の皆様がお座り頂く中陣と外陣、そして本尊のお薬師様が祭られている内陣とに分けられています。その内陣は三メートル低い位置に作られていて煩惱の谷と言われております。比叡山の修行僧は、その煩惱の谷でお勤めします。ただし本尊様は、須弥壇の上にお

祭りされているので、中陣にお座り頂くと皆様の目線と本尊様の目線は同じ位置になります。普通の本堂の内陣は一段高いところに造られ、住職はその高い位置でお勤めし、本尊様は更に高い須弥壇の上にお祭りされた居るので、参拝者は高い位置に祭られた本尊様を拝することになります。根本中堂の本尊様は、何故皆様と同じ高さにお祭りされているかと申しますと、本尊のお薬師さまは、何時も皆様と共にあって、苦楽を共有して下さると言うことなのです。安らかで安心に満たされる本尊様のおられる所が、彼岸の境地でございます。私達の生活しているこの社会は、様々な争いや悲しみ、更に最近には孤独社会と成り、苦しみに満ちております。この不安だらけの社会を**此岸**と言っております。比叡山で修行する僧侶は安心に満たされる、仏様の境地に近づけるようにと、毎日この煩惱の谷で修行を重ね、参拝者の皆様が彼岸の境地に橋渡しをしているのでございます。私も九月二十日、二十一日まで、わずか三日間ですが、この煩惱の谷でお勤めして参ります。

ともいきの輪

No. 5



菅澤洋監督

ともいきの輪、今回はアスレチックの監督、菅澤洋さんをご紹介します。菅澤さんは、以前は都内で生活しておられました。お父さんが度々喘息の発作をおこし苦しんでおられたそうです。でも奥様のご実家である印西にお帰りに成られると、お子さんは、たちまち元気に成ってしまいました。

そこでお子さんの為にも、環境の良い印西で暮らそうと思ひ、引っ越して来られた、との事でした。菅澤さんは、アスレチックと言うチームを率いて、ティーボールの監督をしておられ、その人望から親子で四十人以上の人が集い毎週土曜日に小学校の校庭で練習を重ねておられます。昨今、自分の部屋で一人自己の世界に籠もりがちのお子さんが多いと聞きますが、ここでは親子で練習に励んでおられました。お子さん達は「お早う御座います」「有り難う御座いました」と、きびきびした挨拶は、とてもすがすがしい光景でした。親御さん達も、お互いに呼び合う名前を「○○コーチ」と、名字の下にコーチと言う敬称を付けて呼んでおられました。とてもすがすがしい事と思ひます。このアスレチックの皆さんが、八月二十三日、昨年同様に東光院で一晩の合宿をされて、夕方本堂で心静かに座禅の体験をされました。お子さん達との、とても尊い御縁を頂きました。

私達は、何の為に生きてるのだろうか



ねーねー
お坊さん、僕は、交通事故で亡くなってしまったんだけど、今はお浄土の阿彌陀さんに守られて居るから、なんの迷いも憎しみも無いんだ。でも、最近僕のお母さんも過労で亡くなってしまった。お父さん一人暮らししているんだよ。お父さん、これからどのように生きてくのか、僕心配なんです。そして人は何の為に生きてるのか教えて下さい。



そうだったの君も、お母さんもういぶんつらい。思いをしたんだね。そして今、君のお父さんも、君以上につらい思いをしていることだろうね。お父さんとしては、家族があつて、自分の努力によって家族が幸せに成り、喜んでくれる。これはとても嬉しいことで、生きる事の目的と指針になっていたことだろうね。それが一瞬にして失ってしまったのだから、さぞ気落ちしていることだろうと思うよ、早急に人として生きる、真の意義を見いださないとイケないね。この問題は、君のお父さんだけ

彼岸法要のご案内

秋彼岸法要 9月23日(火曜)
東光院本堂は、午後1時より
平成霊園は、午前10時30分より

仏様、ご先祖様、そして様々な人々に「お陰様」と感謝の念を捧げたいと存じます。皆様のお参りお待ちしております。
東光院 電話 0476-46-2471

の問題では無く、今の日本の社会全体の問題でもあるから、みんな考えて君のお父さんに伝えてあげるから君は何も心配しなくて良いよ。

さて、これは人ごとではありません。身に迫る、私達の現実問題でございます。私達は、何の為に生きているのか、何の為に生きるのか、この生きていると言うことの確かな指針をつかんでいないと、迷いの境地に於いて、つらい日々を過ごすことに成ってしまいます。今、高齢者から若い世代まで一人暮らしの人が大変多く成って参りました。このお父さんは、家族の幸を願う、家族の幸を喜びとし、生きる事の指針としていました。もし他人同士でも、家族と同じように他の幸を願ひ、他の幸を喜びとする環境が築けたら、生きる事の真の意義を見いだす事が出来るように思われます。と言っても現実には、それぞれの個性や、上下関係などが絡み合ひ、我が儘なエゴをふりかざし、己を捨てて他の幸を願うと言う事は大変困難な事でございます。実は、この己を捨てて他の幸を願う事の出来る人、これは悲しみや苦しみを経験された人なのです。自我をふりかざす事の無意味さを知り、そつと慈愛心を振り向ける事が出来ます。これは、私達の問題として今後取り組んで参りたいと存じます



まなしい時
かたしい時
心とめて
風を聴け
雨を聴け
海を聴け
山を聴け
観音の声を聴け

これは天台宗ハワイ別院の住職、荒良寛様の書です。お釈迦様は、この世は「苦」である。己の思うようには成りません。とお説き下さいました。起きてしまった様々な苦しみ、この出来事を、いくら悔いても元には戻りません。心静かに大自然の営みを見つめ、御仏の導きに耳を傾けてみるのです。何時の日か、この苦しみの経験が、「大いなる御仏の導きであった」と、真の生きる事の指針が見えて参ります。